



The Whisper from Amherst



エミリーのささやき

エミリーはこの詩を、生と死というよりは季節の推移に「自然」の高揚を感じ取る思いを表した抒情詩（じょじょうし）として制作したのではないかと亀井氏は解釈しています。「ドルイド的な変化がいま自然をたかめる」という部分が根拠のひとつだと思います。ドルイドとは、古代ケルト人社会における祭司のことで、宗教的指導者にとどまらず、政治、魔術、予言にも従事していました。エミリーは虫の声に、そのドルイドのような変化、つまり自然の神秘的・魔術的な変化を、またその予兆を感じたのでしょう。

彼女はある手紙の中でこの詩をMy Cricket「わたしのコオロギ」と題したそうです。この詩の解釈は諸説あるようですが、彼女の最高傑作のひとつという評価は、ほぼ定着しています。

‘Further in Summer than the Birds’

Further in Summer than the Birds
Pathetic from the Grass
A minor Nation celebrates
Its unobtrusive Mass.

鳥たちよりもさらに夏おそく
草むらのかげで悲しげに
ちっちゃな群れが挙行する
人目につかぬミサを。

No Ordinance be seen
So gradual the Grace
A pensive Custom it becomes
Enlarging Loneliness.

聖餐式（せいさんしき）は見えず
恩寵（おんちよう）の到来もゆるやかで
ミサは物思いに沈んだ情性となる
孤独を拡大しながら。

Antiquiest felt at Noon
When August burning low
Arise this spectral Canticle
Repose to typify

八月が燃えつきようとする頃
真昼というのにたいそう古めかしく
この幽霊のような聖歌はわき上がり
寂滅（じゃくめつ）を表象（ひょうしょう）する

Remit as yet no Grace
No Furrow on the Glow
Yet a Druidic Difference
Enhances Nature now

恩寵はまだ取り消されたわけではなく
輝きに影はさしていない
だがドルイド的な変化が現われて
いま「自然」をたかめる

（岩波文庫「対訳 ディキンソン詩集」亀井 俊介編 より）

